

勝林寺

蓮如上人ものがたり
日見玉尼さまのこと

今月十四日、神戸の別院で蓮如上人五百回遠忌法要が勤まりました。出石組の団体参拝のバスにわたしも乗せていただきてお参りすることができました。素晴らしい雅楽演奏のなかで進められた法要全体に酔つてしまいましたが、なかでも梯実円先生のおはなしに年、甲斐もなく感涙にむせんでしまいました。メモする余裕もないほどでしたので、かえってから皆さんに報告することもできません。お寺さんにお詫びにいつたら、それではこれをといて、先生の話された見玉尼さまのことを書いた本のコピーをくださいました。それをたよりによく報告かできます。

蓮如さま28才で長男順如さまができ、つづいて30才で長女如慶さま、32才で次男蓮乘、34才で次女見玉さまがおできでした。それについてほとんど一年おきに併せて7人の子供をもうけになりました。この七人の母は最初のおくさまの如了といいうお方であります。この七人の母如了さまも最後の子供の出産後まもなく亡くなってしまいました。しかたなくその妹に当たる蓮祐といいうかたと再婚なさるのですが、この蓮祐奥様とのあいだにも、毎年のように10人の子供達をお休みになりました。のちに蓮如さまのあとを継いで代九代のご門王になられた実如さまは、この蓮祐奥様の第一子であります。

それはともかく当時本願寺は貧乏のどん底でありました。蓮如上人は毎日ご教化に忙しい中、炊事洗濯などを手伝いながらの毎日であったということです。それでも子供を親の手元で育てることはできず、長男の順如たけを手元にのこしあとの子はみな小さい内から禅寺の給仕や小僧にだしたり丹波の国へ里子にやったりそれは親子ともともつらい悲しいご家庭でありました。

わたしも女で母親でありますので、わが子を手元で育てられない母親の身を切られる

つてござりました。

といつのは二番目のおかあさま蓮祐さまは亡くなっていましたので、父の身の回りの止話を、そして残された幼子の子育てそれらを身にひきうけて帰つてこられたのでした。

した。

見玉お嬢さまは、実のおかあさまと七才の時に死別。二十三才で二番目のおかあさまとお別れ。そして

吉崎へ帰つてまもなく実の姉が二十八才でなくなり、また翌年幼い七才の妹も亡くなっています。

見玉様は、愛別離苦、度重なる肉親とのつらい別れ、またお父様のお世話の苦労、そうしたなかで、真剣にお父様から「生死いすべき道」、お念係のみらを一筋に聞いていかれるのです。

響いてくださる如来様のお呼び声南無阿弥陀仏を、ひたすらのより所に、見玉さまは、女の命に耐え抜き女のいのちを輝いて、「十四才の短い生涯をおえていかれたのです。

毎年わたしたちの寺勝林寺では七月八日九日と永代経がお勤まりになります。そして、九日は五十年以上も伝統のある勝林寺仏教部員が持ち寄る作品展示会です。仏教の方々のお世話で、ご本堂の西面に展示していただきます。陶芸もあります。写真・ちぎり絵・絵画・書道作品、パッチワーキ・手芸・縫製作品などさまざまです。今年の展示会で一際目を引いたのは、大きな額に入ったすばらしい書道作品でした。元校長先生で今この町で書道を教えていらっしゃる方が、お寺に寄付して下さったものだそうです。「唯仏是真」と書いてあります。「ただ仏のみこれ真(まこと)」

このことについてご院家さまからご法話をいただきました。

「ただ仏のみこれまこと」というのは、聖徳太子さまがいつもお漏らしになつていたことばだそうです。

当時、権力争いの中で、だれもが敵味方に別れて、親族肉親どうしでも殺し合いをしなければならなかつた時代。何一つ誰ひとり頼りにするものない毎日を、「和(ヲ)以テ貴シトナセ」、和平を願いながら果たせなかつた太子さまが「世間虚偽・唯仏是真」。「何一つ誰ひとりたりたよりになるもののないなか、ただ仏さまだけが真実よりどころとなつてくださいました。その太子さまのお呼びを、偶然かもしれません、わたしたちの親鸞さまは「世間のこと、みなもつて、そらごとたわごとまことあることなきに、ただ念佛のみぞまことにておわします」と、親鸞様は親鸞さまのお苦しみのなかから、呼んでくださるみほけさまのお呼び声にすがりついて行かれたのだということです。

それからまた、蓮如上人さまが、あの「白骨のご文章」の一番おわりに「されば人間の

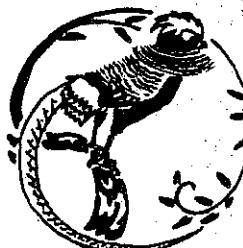
唯仏是真

はかなき」とは、老少不定のさかいなれば、だれのひとも、はやく後生の一大事を心にかけて、阿弥陀仏をふかくたのみまいらせて、念佛もうすべきなり」といって、何頼るものもなくただ苦惱の泥沼をはいざりまわつた。当時のおんなたちに「ひたすらすけたまえと弥陀におすがりもうせ」とおしえてくれたまつたのも、やはりこの太子さまのこころのうけつけであつたのだと。

世間虚偽 唯仏是真
お話ししていく、これはまあ、ひとつではなく、わたしへのおしえだつたんだわとおもつて、ついつい涙がでてしまいました。この「唯仏是真」の額は、ずっと末長く本堂に掲げられるのだそうです。

八月のことよみ

三日	十六夜会こども会(福成寺)
四日	正福寺五七日
七日	正法寺追悼法要
八日	全戦争犠牲者追悼法要
十日	玉日会定例法座
十一日	森戸杉夫氏宅忌明・初盆
一二日	斎藤義明さま初盆
一三日	出石町内お盆参り
一四日	出石町内お盆参り
一五日	奥地余男氏宅法事
一六日	蔭山和子氏宅法事
一七日	正福寺忌明け法要
一八日	十六夜会定例法座
一九日	勝林寺こども研修会
二〇日	岸下実さま初盆
二一日	横山光義氏宅法事
二七日	兵庫教区門徒公組代研修会
二八日	赤穂西光寺仏婦団参
二九日	正福寺忌明け法要
三〇日	神姫組追悼法要
三一日	生田善一さま法事



第六回 玉尼さまのことII

詔行無常といいます。また、愛別離苦ともいいます。ことに仏教ではインドの昔から言い古されたことばですが、それを単なる言葉・理論としてではなく、現実の体験として、その苦悩の中に如來の教えを聞き取つていかれたかたが蓮如上人というかたです。

妻を子を幼い孫を次々に失つた蓮如様。とりわけその人たちを見取りながらついにご自身お念佛のなかに若い生涯を閉じた見玉さま。その見玉さまを失つたときの蓮如さまのお胸のうちを、今に残る一通のご文章に思ひやることがで能くあります。

梯先生ご自身の声をつまらせて拝読くださいました。

あの娘、見玉といつた。玉を見たひととは、まことそのような人であつた。

若き日、浄土宗の念佛のなかでくらしもとの、並々ならぬ因縁から、親鸞様ご一流に帰りつき、息引き取るそのときまで、真如の玉南無阿弥陀仏に目を開き会わせていただい

正福寺ご院家さま
山崎 一朗先生

一逝十去

出石組の組長として組内を取り仕切つていてくださいました。のみならず、わたし個人にとって師であり兄であった方であります。七月二日、七十七歳でした。いまだにその聲咳に接している思いです。

七月二日、七十七歳でした。いま

だにその聲咳に接している思いで

す

山門・鐘楼校建築染
七回忌までにと願つたのですが、山門の瓦も葺き上がりませんで

した。七月三〇日には鐘楼の建前とか。難工事のよう申し訳なく存じます。

例年どおり八月十九日。午前九時受付。「ほとけのこどもを育てましょ」二十五年以上続けて来ました。誘い合い勧めあってこと

もも仏婦会員も参加ください。

七月二日、七十七歳でした。いま

だにその聲咳に接している思いで

す

結婚式

七月十三日(日)午前、正法寺の数森伸二さまと小幡仁美さまの仏前結婚式を上げました。お二人の幸せを感じて信じなん

正法淨土に
より会いてこそ
数も理もあらん

(伸二・仁美・小幡・数森・正法寺と歌い込みました)

夫婦互いに信じあいましょう。
人間、我が身を主張する段には、
それなりの理屈(理数)もありま
しょう。だが、そのような対立抗
争の世界に生きるのではなく、正
しいおみのり「お淨土」(如來さ
まの光の世界)をより所に、「俱
会一処」と、信じあい念じあつて
生きようではありませんか。どう
ぞおしあわせに。

見玉本人もさることながら、その往生の姿を聞き伝えたもの、だれもだれもが、お念佛に出会えた不思議さを喜んだことであった。

ある人の夢。

見玉さまの火葬の夜明け方、その白骨の中より三本の青い蓮の花。その蓮の花の中から各々一寸ばかりの金色の仏があらわれ、やがてそれぞれ見る見る蝶となつて消え去つていった。だれもがそれは正夢と思つた。見玉さまは真如法性のお淨土を見よとお誘いくださる還相の如來さまだつたのだと。その証拠に、葬送の日には雨雲はれて真如の月が煌々と照りわたつた。

身も心も苦労かけ通して死なせた若い我が娘ではあつたけれど、思つてみれば、その苦惱の中にこそ響いてくださるお念佛をこの蓮に知らせてくれた、わがためには善知識であります。

あつたよと。

仏壯仏婦役員で万端お莊嚴完備のなかでお迎えした七回忌法要は、台風一過、二十七日は大変なご参詣で賑々しくお勤めできました。西宗寺さまのご懇切なご法話をいただき感銘ひとしお。ありがとうございました。

先工ししく過ござる。

(八十五年を生きて来た男)
そのうちお金がたまつたら、そのうち時間のゆとりができるたら。そのうち、そのうち

できない理由をならべているそのうちにとうとうなにもしなかつた。

そのうち空しく人生の幕がおりる。

あの道、この道、日が暮れる

いまたこの道帰れない

ひとひらの花びらが、川のながれに落ちて、大きな渦に巻きこまれると、もうなかなかおられない。

あちらに打たれ、こちらで叩かれ、ぐるぐる回つて、そのうちに、傷つき破れ、ボロボロになつて、花びらは渦のなかに消えて行く。

経済成長の渦のなかに落ち込んで、人がするからわたしもする。隣が買うなら負けてはおれない。

物欲と、見栄と、私欲名譽欲で、人を蹴落として、獅子奮迅の渦のなか。

一生暇なく働いて、手おれ足おれ力つき親鸞さまは「空しく過ごす」人生を悲しまれた。

蓮如さまは「宝の山に入りて、空手ではかえるなよ」

ちっぽけな物欲・我欲で、互い互いに、片意地はつて、いのちぶつけあいながら空しくすぐる私に

考えも思ひもおよばぬ不可思議な光にめざめておくれ。とうてい量ることも出来ない無量のいのちをより所に、生き直そうではないか。そう呼んでくださる南無阿弥陀仏さまのまっただなかにいさせていただいている